慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第八十三号）

目次

汝若し念ずること能はずんば……花田正夫…（1）
御一生を追憶して……福島政雄…（4）
仏教生活の告白
——信心の讃歎——……自在丸新十郎…（9）

第八卷　第二號

汝若し念ずること能はずんば
應に、無量壽佛を稱ふべし

花田正夫

仏陀の晩年、王舎城の悲劇の主人公である韋提希夫人の懇請に応じ玉うて、一切善悪の凡夫の救済の道を説かれたのであります。その觀無量寿経で、散乱の意をやめ、心をこらして行く定善の道と、種々の善事を行じて行く散善の道を説かれますが、煩悩具足の身を持ち、五濁の世に住む私共には、善どころか、あらゆる悪を身に具して、衆苦身に迫る臨終に立ちいたるのであります。この十悪、五逆、不浄説法、等々、あらゆる不善を身にもつた極悪最下の凡愚の臨終に、幸にも善知識にめぐりあひ、妙法を聞き、仏を念ぜよと勧められる。然し百雷の一時に落ちかかる如き、衆苦に悶絶する身には、妙法を聞いても心に入らず、仏を念ずることさへも出来ないのであります。ここに立ち到つては万計つきはてるのでありますが、そこに善知識は、絶対不二の救済の綱を、大悲の至極から下されて

『汝、若し念ずること能はずんば
応に、無量寿仏を称ふべし』

と勧め玉うのであります。ここに極悪最下の身も、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、と十声称へて命終し、浄土に生れさせて頂くのであります。

さて、観経のこの下品の機類がたすけられるところを、浄土の祖師達は皆深く見つめられて、そこに救済の光明を仰いで居られます。

聖道のさとり難いことを体験せられて、唯他力浄土の一門のみが我等の救はれる道であると叫ばれた道綽禅師は『一生悪を造れども、弘きみ誓によくも値ひ、安養浄土に

生れて無上仏果を得させて頂けるとは』と随喜して居られます。

日本の小釈迦とまで讃えられた源信僧都も、『余が如き頑魯の者』と告白せられつつ、いよ〳〵もつて『極重悪人、他の方便は更になし。唯、弥陀仏の名を称へて、必ず往生を得よ』の実語を讃仰して居られます。

法然上人は勧経釈で下品の機類の救済せられるところで『この品、最も肝要なり。すこぶる我等が分に相当せり』と解釈せられ、御自身は、十悪、愚痴の法然と常に申されて居ります。

さて『善導独り、仏の正意を明らかにし玉ふ』と親鸞聖人が喝仰される善導大師は、ここの『念ずること能はざる者に、唯称へよ!』との大悲の思召を深く汲みとられ、口称本願の玄意を顕彰して下さいました。即ち、極悪最下の機に、極善最上の法が、『唯称』の二字に濺ぎ込まれることを明らかにして下さつたのであります。

『ひとへに善導一師による』と終生洪恩を謝し玉うた法然上人は御一代の勧めを一紙に縮められた、一枚起請文に『もろこし我が朝に、もろ〳〵の智者達の沙汰し申さる観念の念にもあらず、また学門をして念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ「往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞ」と思ひとりて申すほかには別の仔細候はず。……念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者の振舞をせずして、唯一向に念仏すべし』と教へられます。

『本師源空いまさずば、この度空しくすぎなまし』と謝し玉ふ親鸞聖人は、歎異抄の第二条に

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと よき人の仰を被りて信ずるほかに別の子細なきなり。……たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄に堕ちたりともさらに後悔すべからず候』

と御自督のぎり〳〵一杯を打ち開けて下さつて居ります。近角常觀先生は、この第二条のところを

『親鸞自身は御慈悲の念仏ばかりで阿弥陀仏が助けて下さるぞよとの、善知識の仰を承はりて、そのまま信じいただくほかになんにもない』

と、水際だつて、解り易く、嚙んで含めるやうに、意訳されて居ります。

其の名号を聞き

さて、極悪最下の身に、斯る大悲の至極の名号、南無阿

弥陀仏を聞きまつる時、自然に念仏申さんと思ひ立つこころが発起せしめられ、その時同時に、攝取不捨のめぐみにあはせて頂くのであります。逃げようとしても逃げられない広大な念仏におさめられて、必ず浄土に生れることが出来る身にさだめられるのであります。

繰り返して頂きますれば

『汝、若し念ずること能はずんば
応に、無量寿仏を称ふべし！』

何たる大悲、何たる大慈でありませうか。

この実話を聞きまつることが、大経の要、願成就文の、三世十方の諸仏の名号を称讃される声を聞くことになるのであります。其の名号、そのとは諸仏の讃歎せられる名号であります。

その大悲の名号を聞きまつつて、あゝ有難い、お念仏を申しませうと思ひ立つこころと共に、すくひとられて了ふのであります。そして、生命があれば一生涯を貫ぬいて報謝の念仏を相続されるのであります。

然し扇子にかなめがあります如く、仏法もかなめをしつかりと聞かねばなりません、博多の七里恒順師は『はまつて念仏なさい』と常に繰り返して勧められたと承はりましたが、この『はまつて』の一句、実に千金万金の価があります。

池山先生は『なくちやあならないもので、しかもそれひとつで満足、といふのが、ただ念仏して、だよ』と申され、しかもその味ひは『池山におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと、親鸞聖人の仰を被つて信ずるばかりです』から頂いて居られました。

下品下生の身、念ずることも出来ない身に、常時不断の仰せがひびいてやみません『応に、無量寿仏を称すべし』と。最近私の目につきました李白の詩に

『長安、一片の月。　万戸衣を擣つの声』

と言ふのがあります。長安の都の中天高く、一片の月が照り輝やく時　あちらの家からも　こちらの家からも、衣をうつ声がひびいてくる、といふ情景でありませう。さて『応称無量寿仏』の一片の月影が　凡愚の心の空に輝く時、一切の群生の生き〳〵したよろこびの声が地にみちることでありませう。

『春は枝頭にあつてすでに充分』の二月、心月を讃へて春風にのせます。

（完）

長浜22組

近角常観先生の御一生を追憶して

福島政雄

一、大煩悶御入信まで

或る人は、明治時代の親鸞聖人と申してゐました、近角常観先生が、浄土に還帰遊されてから、もはや十四年の月日は過ぎ去りました。先生御存生の往時を思へば様々の追憶や感慨が胸を流れます。ここに先生の御一生を追憶申上げ、花田さんから戴いた資料を主として、些か及ばぬ筆を進めて見たいと思ひます。

幼少時代

先生は明治三年、滋賀県東浅井郡朝日村字延勝寺といふ所の、西源寺といふお寺で誕生遊されました。檀家僅かに二十七軒といふ小さなお寺で、大谷派の末寺であります。

御幼少の時、筆と紙とあれば、それで熱心に遊ばれ、他の玩具はお用ひにならなかつたといふので、特別の御性質であつたことが察せられます。

或る時、お友達のいたづらな子供に、着物を汚されて帰られた時、厳父のお叱りを受けられましたが、此の事が先生の将来に非常な影響を及ぼしたと承つてゐます。正しい事の為には、どんなに苦しくてもこれを主張せねばならぬといふ精神を養はれたと先生は言つておいでになります。

お父様は此の事をはじめとして先生の精神に深い感化を与へたお方でありました。先生八歳の時、お父様からはじめて姥捨山のお話を御ききになりましたといふことでありますが、これが先生の心に深い感銘を与へて、後年、先生御入信のあとでは、一生涯、信仰上の御講話のときには、必ず姥捨山の話を繰返してお話しになりまして、それが聴く人に深い感動を与へたのであります。

明治十五年、十二歳の御時、三経の訓読を習はれました、これも厳父の御導きであつたと察せられます。

明治十六年には舎弟常音先生が御生れになりました。常音先生は後に御兄上常観先生の伝道の上に、無二の御助けをなされた方であります。

その後先生は京都で三年間宗学の勉強をなされました。

それより本山から内地遊学を命ぜられ、東京に移られましたが、自重なされて高等中学（第一高等学校の前身）の入学を一年おくらせて勉強なされました。

青年時代

明治二十四、五年の頃、東京高等中学に御在学の時代に松島において仏教夏期講習会を御開催になりました。また帝都仏教学生青年会を提唱なされ、日本全国の学生仏青の端を開かれました。

花祭の行事や、親鸞聖人の降誕会も先生が卒先して始められたのであります。実行活躍の先生の真面目がここに鮮かにあらはれて来ました。

白川党事件

明治二十九年には白川党事件であります。これは清沢満之先生を中心として、財物と権勢欲とに濁つてゐた宗教界の革新運動が展開せられたのであります。この運動は明治三十年に及んだのでありますが、此の時は清沢先生に従つて大に理想主義を発揮せられた常觀先生の面目が躍如としてゐるのであります。

大煩悶

清沢先生の理想主義に感激して活躍された常觀先生に、その理想主義が行きつまる時が来ました。それは明治三十年の四月でありまして大煩悶におち入られたのであります。それは実に春から秋まで続いた大煩悶でありまして、その有様は先生の懺悔録に委しく述べられてありますが、二月の二十日頃から身体が疲れて心が苦しくなられ、友達同志の仲の悪いのが苦になり、御自分に他人に対する隔て心があるやうになつたと気にせられ、自分は親切を尽すのに他人は何故あのやうに悪くとるであろうと恨み心を起したりしたと述べられてゐます。その大煩悶の有様を先生はなほ次のやうに述べて居られます。

『彼是してゐるうちに、四月八日、釈尊の降誕会となつた。其前の晩に、人が翌日を楽しんで色々話をしてゐるのが、私には少しも愉快でなかつた。このやうに初の間は人を善くしようとしたのが、終に自分が悪くなつてしまつたが、それでも自分では、世の中のものどもは如何にも不真面目である、自分は真面目で一寸の隙もないと考へて居つた。こんな時には書物を読んでも教場へ出ても一向面白くない、むしろ解らない。唯々、人生上のことを気にして考へてばかり居つた。かうなると有りとあらゆる悪い心は皆起つて来る。今まで仏教を喜んだのも何にもならん。仏様も一向有り難くない。友人にも見離される、いかに愛読の書物でも一向味がない。総てのこと何を思うても心を慰めることは出来ない。わづかに食うたり飲んだりする上に少

しばかりの味ひがある。そこで唯五官上に一時の楽を見出しつつある物質的の人物になつて仕舞うた。

人間が苦悶にあるの当時に、兎角堕落し易いのはこの故である。決して無理ではないと思ふ。酒を飲んでは一時の気をまぎらし、大言壮語しては胸中の鬱を散じようとするのは、是非もないことである。

私はその時分には事によると人を殺すことも出来たかしらんと思ふ位、人を殺すのが恐ろしくないばかりではない、自分が死ぬことも何ともない。現に五月二十三日の晩は自分が死なうかと思うた。

此時の心の有様を有りていに懺悔して見るに、前には身命を賭して宗教の為に尽さんとしたものが、頗る小成に安んじ、小さなことを眼につけるやうになつたかと悲しみ、また前にかういう風にしたらば善かつたにと後悔して見たり、前には同情心があつたに、何故にこのやうな無情の人間になつたかと愚痴をこぼし、人が自己を疎んじ、或は侮るやうに考へ、前に東京に出て来たときは、意気天を衝く有様であつたに、今のこの有様は何事ぞと悲しみ、我が枕頭に仏あり聖教あり、而して何ぞ心を安んぜざると悲しく、故郷の父母兄弟を思うては、自分の挙動がいかにも悠々として居るやうに思はれ、前には我が心は天の如く大なりしに、今は何が故にかく井蛙の如くになつたか。以前は一たび立てば人を動かすに足り、また同僚のうちでも至誠の心をもつて遇せられたに、今は人が自分を見ること土芥の如くして居るやうに邪推し、自分は宗教家でありながら此のありさまは何かと自ら責め、前に安心立命して居るかの如く人に語つたは、人に対して申訳がないと悲しみ、終には、前にはかほどまでに色々尽力したが、千仞の功を一簣に缺きたるが如く悲しんで見たり、人が親切に慰めてくれれば、その親切に対して感謝の心がすくないと自ら責め、甚だしきに至つては、人を感化すべき自分が、他人の感化を受けて何の面目があるかといふやうな奇妙な考へを起し、また他人の病気に対して、以前ならば疾く往きて看病をすべきに、今は非常に冷淡になつたかの如くに考へられ、見るもの聞くもの、皆苦悶の種子ならざるはなく、善きにつけ、悪しきにつけ、皆愚痴の材料たらぬはなき有様であつた。

最後に自ら思ふには、我が臨終近づけり、我が命は既に死せり。且つ精神的に人より殺されつつあるに拘はらず、猶菩提心の起らぬは何事ぞ、汝自殺せんと欲せば、須らく男らしく之を行へ、而して自殺して果して何れの処に行くや。かの善導大師が所謂、往くも亦死せん、還るも亦死せん、住まるも亦死せん。一種として死を免れず、といへる有様であつた。

最後に、汝は自殺するか、若しくは破天荒の事を為すか、二者その一つを択ぶべしと叫んだが、其夜の苦悶の極

であつた』

苦悩の絶頂

此の懺悔の御言葉を読めば、先生が如何ほど烈しい理想主義の人であらせられたかがよくわかります。非常に道徳的なひびきがあります。

なほ先生は友人関係といふことに熱意を持つて居られたことが感ぜられます。

『世の中に真の朋友がほしい。いかなるときにも我を見限らず、満腹の同情を以て我を慰め、我を導く友人をほしいとしみじみ思うた』

と言つて居られます。また実際、先生の苦悶時代に、その苦悶の御姿を夢に見たといふお友達もありました。苦悶のままで松島の講習会から東京へお帰りになり、それから尾張の友人をお訪ねになりましたら

『友人が私の顔を見るなり、ああ是であつたと、無言の間に深き同情を注ぎて、大層慰めてくれた』

と言つて居られます。それから郷里に帰られましたが、苦悶はなほ続きました。八月は苦悶の頂上で、一つの小座敷の中を足を爪立てて舞うて居られたといふことであります。

此の時、お父様に対しての感じも痛切であつたやうであります。大無量寿経の五悪段の第五の悪の最初の言葉を御自分のこととして感じて居られます。

「父母教誨すれば、目を瞋らして怒り応ふ。言令和がず　違戻反逆す　譬へば怨家の如し。子無きには如かず」

この経説が、一つも他人の事とは思はれなかつたと言つておいでになります。

大難病

九月になつて非常な難病（筋炎）に罹られました。肉の下が膿む病気で、非常な痛みを起すルチユウとかいふ病気であつたといふことであります。

夜になると七顛八倒の苦しみであつたといふことで、御令弟が介抱をなされたさうでありますが、先生が眠られると知らず識らずヒーコーと泣き叫ばれたのが腸にこたへて鋸で曳かれるやうで、令弟はその後もその事を想ひ出せばぞつとすると言はれたといふことであります。

長浜病院で切開手術を受けられ、二週間の入院、一命も或はむつかしからうと医者も言はれたさうでありますが、その時の先生の御心境は次の通りでありました。

『それでも自分は死ぬるといふことを更に気にかけなんだ。唯自分の浅間しく罪の深いことのみを苦に病んで、どうか善い友人をほしいとばかり思つてゐた。

病気がすこし快くなつて病院を出たときは九月十五日である。その後、十七日にはじめて病院へ切り口を洗ひに行く途中、車の上で、自分は罪の塊りである。実に極悪である。自分は生きてゐるといふのは名前ばかりで、実は此の途中の石塊とあまりかはりはないと思うて、淋しく味気なうて堪らなかつた。』

此の身心の苦悩の絶頂に達せられた時が、やがて御信心の開ける時でありました。時正に機縁成熟、先生は仏陀の至心に触れて、心がひろ〳〵と開け、明治の親鸞は　ここに心の誕生をなされることになりました。

入信の自覚

『それから、病院から帰り途に、車上ながら虚空を望み見た時、にはかに気が晴れて来た。これまでは心が豆粒の如く小さであつたが、此の時、胸が大に開けて、白雲の間、青空の中に吸ひ込まれる如く思はれた。

何だか嬉しくてならんで家に帰つたが、叔父が私の顔を見て、どうしたのか一時に顔が変つたと大層よろこんで呉れた。』

ここで先生は御自分を深く反省なされて信仰の自覚に入られました。つくづと考へて大に自分の心にわかつて来たと言つて居られます。永い間先生は真の朋友を求めて居られましたが、その理想の朋友こそ仏陀であるといふことを自覚なされたのであります。歎異抄に「廻心といふことただ一度あるべし」とある、その廻心を先生はここに体験せられたのであります。

法流無尽

六連島　お軽同行述

こうもきこへにや　きかぬがましか、
きかにやおちるし　ききやくろう。
今のくろうがさきでの楽と、
きやすめいへどきはすまぬ。
すまぬまんまと、すましにかかりや、
雑修自力と　すてらるる、
　　どうで他力にならぬやら。
自力さらばといとまをやりて、
わたしがむねとは手たたきで、
たつたひとこゑきいたのが、
そのひとこゑが千人力。
四の五のいふたはむかしのことよ。
何にもいはぬがこつちのもうけ。
そのままこいの勅命に
　　いかなおかるもあたまがさがる。

佛教生活の告白

——信心の讃歎——

自在丸新十郎

人は仏教を信ずると、いかにも生れ代つたやうな立派な善人になれるやうに思ひこんでゐられる人があるかも知れないが、それは大変な誤りである。仏教を信じたからとて、決してそんなに理想的な立派な人物に生れ代るとは決つてゐない。だがそんな立派な人物に生れ代らぬとも限るまいが、それは前世の因縁に支配されることで、そんな人物に生れ代るやうな素質が幸ひ賦与されてゐたからであらうば、そんな人間は本当に自己といふか、人間といふか、そんなものの本性といふものが判つてをらぬことを実証してゐるやうなもので、未だ信心といふ仏智の鏡に自分の姿を写して貰つてゐない方ではないかとしか私には思はれない。何故なれば、仏教は結局仏智を求むるのが目的だが、その仏智は人智の浅はかな様相や、罪悪にしみこみ、肉欲の泥濘にはまりこんだ、あさましい生活しかしてゐない現実の私共凡夫の姿を、ありのままに映写して下さるものだからである。

仏教は自己の問題を解決して頂くのが目的であるが、自力聖道門はともかくとして、他力浄土門では、阿弥陀如来によつて救済される身分になして貰ひこそすれ、自分が立派な人間になつたとか、善人に生れ代つたとか云ふが如きは、甚だ以ておこがましい次第といはねばならない。

信心生活においては、罪悪の自覚や、悪人たるの反省がうながされるものである。だから自分は善人だ、立派な人物だなどといはんばかりの態度を以て他人にのぞみ、他人を悪人扱ひし、くだらぬ人間扱ひするものがあつたとすれ

吾々は肉体をもつてゐるからには、どうにもならぬ穢い心や、悪い行がつきまとつてくる。金を貪り、地位を求め、権勢にあこがれ、肉欲をあさる誠に浅ましい行動から離れようとしても離れられない。これが私の見つともない姿である。これは吾々が人間といふ肉体をもつてこの世に生れ出た瞬間から約束されてゐることで、どうにもならぬ人間の属性としか私には思はれぬ。だからそれがいかないなら、肉体を棄てて人間を辞職するより外に方法はないことになる。灰身滅智を叫ぶ小乗の徒にみられる狭い量見である。だがそれは余りにも短慮ではなからうか。

思ふにこんな人々は、人間の性質を、生物学、或は動物学の方面から究めてゐないからであらうか。人間は本来他の下等動物から進化して、更に進化の過程をたどつてゐるところの動物の一種ホモ・サピエンスに他ならないのである。

このやうに人間が仏教を信じたからとて、肉体（仏教では穢身といふ言葉を以て表現してゐる）をもつてゐる間は、罪悪といふことはどうにも避けられない問題である。もつとも罪悪といつても、それは人を殺すとか、人の物を盗むとか、詐欺を働くとかいふ如き法律上の問題になるやうな犯罪だけでなく、私はここでは、形の上には表はれないが、不正なことを考へたり、たくらんだりする精神的な方面の罪悪をも併せて考へ度いのである。

仏教は大安心を吾々に与へるものだと説かれてゐるが、果して大安心がいつも得られてゐるかどうかといふと、さうではない。去る昭和二十九年の颱風十二号の際などは、前以て随分心配したものであつた。また判らぬ事件にぶち当ると、誠に不安な思ひになやむし、面白くもないことや、不満なことが、身のまはりにひつきりなしといつてよい程起つてくる。総じていへば、心の波は常に動揺して定まりなく、丁度気圧のやうに毎日時毎上下して落ちつかない。

そこで問題になつてくるのは、仏教生活がそんなものだとすると、仏教を信じても信じなくても、結果は同じで、仏教の存在価値といふものは零ではないかと反問したくなるかも知れない。至極尤もなことである。

ところが仏教を信ずると、大変かはつたことが経験されるのである。否ある意味では、まるで人生観、世界観がひつくり返つてしまふと云つても敢て過言ではないやうである。私はこれから、自分が体験した、否体験しつつある仏教生活について、そんなことを述べて見たいと思ふ。そんな仏教の信じ方は、よいとか、悪いとか、正しいとか、間違つてゐるとか、批判はいかやうになされても構はないが、ただ私に於ては、それはどうにも私の力ではならないことなのである。

それに先だつて、上記のことだけを順序として予め述べておきたかつたのである。斯く言へば、それは矛盾してをるではないか。先に仏教を信じたからとて、善人にもならなければ、立派な人間にもなれぬ、信前信後は全く変つてをらぬといひながら、今は全く変つてくるといふ。おかしなことになりさうだが、この矛盾の解消については後に述べるつもりである。

先づ第一に、私が仏教を信じて以来、気持が大変楽になつてきたことである。以前だと、人々に対して対抗意識が

強く、我慢根性がひどかつたのである。同じ勉強するにしても、あれに負けるものかといふ意地張り根性で押して行つたものである。今日の言葉でいへばファイトである。闘争意識を以てすべてに対してゐた。元より私の性質は陽性といふよりも陰性であつたから、あらはに対抗して戦ふといふ気風ではなかつた。そこで何か議論でもして人に負けることでもあれば、表面まことにおだやかに見へるやうにつくろつてはゐたが、心中誠に不愉快でならぬ。何とかして次の機会には勝たねばならぬと頑張る。また事実議論で云ひまげらるることがあれば、後になつて、いやあれは、実は自分の意見が正しかつたのだ、などあられもせぬ理窟を見つけて、無理にも安心しようと努めたものであつた。

このやうに毎日々々、事ごとに他人と対立して面白くなかつたのである。元来人と平和でゐたいといふ性質のためでもあらうか、それが仏教によつて気分が余程楽にされたのである。それは抗争意識が無くなつてしまつたからである。相手と五分五分に争ふことができなくなつたからである。仏教を信ずる以前と以後とで、気持が全く違つてきたのであつた。以前だと、何か対抗者があつて、負けてはならぬといふ強い意識の下にやつて行つたやうだが——もとよりそんな対抗意識を持たない場合も随分あつたのだが、——そんな意識からでなく、もう少し大きいといふか、広いといふか、全く競争相手のない責任感とか、義務感とかもつと宗教的な表現をかりれば、人生最高の使命といつたやうな、大きな衝動にかられて、一所懸命奮闘努力せねばならなくなつたのである。従つてその結果、相手に劣つた結末になつても、それは少しも羨ましいことにもならなければ、また相手よりうんと勝れた結果になつても、相手を小馬鹿にするとか、自ら尊大ぶるとかいつたことはなくなつたのである。これは全く相手がなくなつたからである。相手になるものがなくなつたからである。相手を呑んでしまつたからである。といふと、大変尊大ぶつた言ひ方であるが、実は相手を呑んでしまつたこちらが、消えてなくなつたからである。否、こちらが相手に呑みこまれてしまつて、あとかたも無くなつてしまつたからである。

人間はお互、五と五で張り合つてゐるから、いつもごとごとやつてゐるのだ。と皮肉な洒落を飛ばされた方があつたが、誠に真をついた言葉である。人間は謙譲な美徳を具へてゐるやうでも、一皮むいでみると、すぐに本性が現はれてくる。結局は他人に負けたくない、他人より優位に居りたい、他人を何とかして支配したいと考へてゐる。そこで余程腰抜で不甲斐ないものでない限り、負けおしみが出て来て五分五分となる。五分五分根性がある限り、平和な生活は望まれない。

そこで問題は、こちらが十でも、先方が零になつて、丁

度縄暖簾みたいなものになつてくれると、当方は大変都合はよいが、仲々零になつてくれない。

こちらが縄暖簾みたいなものになつて、先方の意のままに、つつかれても押されても無抵抗になれさへすればよいが、それが仲々修養などではでき難いのである、ある程度はこれでも成功してゐるやうでも、最後になると駄目である、

処が、私は仏教を信ずることによつて、こちらを零にさして貰つたのである。そのため大変気楽な身分になさして頂いたのである。これは自分の努力でなつたのではなく、全く阿弥陀如来の威神功徳の力によつてなさして頂いたのである。

仏教を信じたら無我の境地に没入さして貰へるのである。『仏教には無我と仰せられ候』と中興上人も云はれたやうに、仏教を奉ずることによつて、私は無我になさしめられたのである。自我といふか、自意識といふか、我慢心といふか、おれがおれがといふ根性といふか、そんな心が失せてしまつたのである。前に大変気持が楽になつたといつたが、その原因は結局、相手とはり合つてゐたこちらの我慢心がとけてなくなつたからである。五分五分根性の自我の角がへし折られなくなつてしまつたからである。

仏教、殊に真宗では、わが計ひがなくなるとよくいつてゐる。そしてその計ひは、今日、悪い計ひのみが計ひで、よい計ひは計ひでないやうに解されてゐる場合に出あふが、それは誤りである。如来を信ずると計ひがなくされるといふのは、善い計ひも、悪い計ひも、共に含まれて一切のはからひ、言葉をかへると思議判断のことである。心の活動のことである。考へ思ふことである。このやうな活動が阿弥陀仏を信じた瞬間から止つてしまつたのである。いはゆる無我になされたのである。だが人間生活の面では、心が常に活動してゐることは少しも昔と変つてをらない。このことは前以て説明しておいた通りである。かやうに無我でゐられる故、いつでも平静な気持で過さして頂けるわけである。

吾々は無我無中で碁を打つとか、将棋をさすとか、書物に読みふけるとか、よくやつてゐるのである。この場合の無我は仏教での無我と多少似通つた点がある。この場合は無我無中で何も分らぬやうになつてはゐるけれども、その実、碁や将棋に熱中して他に心が散らない故、他のことは何も考へてゐないやうに外から見られるだけのことである。意識は依然として働いてゐるのである。女性や男性に夢中になるとか、マージャン、パチンコ、競輪、競馬などに夢中になるのとは多少趣が違ふやうではあるが、また一面あのパチンコの球のぢやん〳〵落ちる音に心をうばはれて夢中になつてゐる時などは、一脉相通ずるものがあるやうである。

仏教での無我は、或瞬間とか、ある時間とか、ある期間に無我無中になつてゐるといふわけではないのであつて、実は如来を信じた瞬間からこの方、いつも無我の状態を保つてゐるのである。而して事に当つては、何時でも前記のやうな無我夢中といつた心の状態にはいることができる。この状態では、心がある一事に没頭されてゐるといふか、雑念を交へてゐないといふか、兎に角、世事一般から解放された。謂はば超時間的な無心の状態に埋没されてゐるのである。人事に関係してゐないから、全く俗事と絶縁されてゐるとも考へられるし、さうかといつて、いつも俗事に連つてもゐるから、その境界ははつきりしてゐるわけではない。こんな状態が私に於て体験されたのであつた。この点、世間的な無我無中は、将棋なら将棋をやつてゐる間はそんな状態でゐられるが、止めた瞬間、直ちに俗世間的な状態に立ちかへつて、無我でも夢中でもなくなつてしまふものである。従つてその間には劃然たる心の状態の相違があるわけである。

無我とは、善念や悪念や雑念など、総ての心想が解放された無念の状態を言ふのであるから、総ての思考にいつても没頭し得るやうな態勢にあるのである。否、ある意味では、既にある一つの事柄に没頭してゐるともいはれ得る。だから私如き生れつき頭が極めて散漫な人間でも、仏教を信ずることによつて、物事を集中して考ふることができ、思はぬ深い思索に耽らせられたり、思はぬ新事実を発見さして頂いたりなどすることがある。そんなでなくても、頭脳使用上の能率といふ点、又は時間の節約といふ点からいつても、私にとつては、誠に大きな利益を与へてくれてゐる。

未　完

新春法信抄

京都市　榊原徳草

……。村田和上の「ねぐさり」を正月に読了。大拙師の浄土系のものを再読。只今は臨済禅師の書を手にして居ります。日暮れて、いよ〳〵先聖達を追ひすがりながら、今更の如く若き日の空費を愧ぢて居ります……。

学んで而してこれを習ふことの出来るやうに、お念仏一つは手に入りましたが、それが指示して下さる学修の場の広大無辺なのに驚いて居るといつた私のこの頃です。いよいよお念仏の底の無い深さを感佩して居ります……。

○

滋賀県　西村武三

お蔭様で昨今は余程体力を頂き、半日位はこそ〳〵動き、あとを休養し、精神も軽く爽かにならせて頂いて居ります。と申しましても亦何かの縁にふれますと勿論暗く重くなりますが、そこに弥陀仏の御恩を仰ぎ、仏願仏力を感じさせて頂き、障りを融かせて貰うて居ります。

福岡県　島仁

乱暴者親の手織で、年を取り

○

三重県　渡辺紋一

宿業に縛られて、一歩も外に出る事が出来ぬ身をつくづと感じます。それにつけても「たのまるるただ念仏のわれにあり、さるべき業はさもあらばあれ」を有難く拝誦いたしました

○

福岡市　和方誠司

ありがたや弥陀の御慈悲に活かされて、めでたき春をことほぎまつる。

たのもしな法の春風吹く初日、世のわずらいもとけてうれしきしたしみはいよ〳〵ふかし法の友この世ばかりの友にあらねば。

○

岐阜県　白木甚吉

愚老迎八十歳春

貧乏苦労八十年　憂夢茫々如雲煙

衆禍波転仰大慈　徘徊欣舞乗願船

○

名古屋　石塚信二

あけくれに煩悩熾盛のわれなれど今朝の雑煮に顔を映して。

香川県　飯塚さだ

新玉の尊き恵み身に受けてひかりのいのち無量寿の喜寿

とざされしのりの蔵をば開かれて宝珠の天華無尽に咲き出る。

咲く華が不思議や仏種の実となりてよもの大地にこぼれ行くなり。

○

奈良市　竹田寿美

元旦や何はなくても南無阿弥陀仏　剣珠

○

米国加州　浅井しづか

現し世にかくまで深き悦びのありとは知らぬわれなりしかど。

このわれに聞かすべしとしてはる〳〵と呼ばせ給ひしおん親の慈悲。

○

盛岡市　長岡高人

……。昨日、京都の香華書館より通信がございまして、故清水凡禿さんの遺稿の出版につき依頼がございました。実はこれは地元遺弟としての私共の年来の宿願でございますので、まことに有難いことと感佩いたしました。また凡禿さんの奥様にお伺ひ致しましたところ非常に感謝してをられまして、万端よろしくとのこと。……切角努力して参りますがお力添へを賜りますやう、改めて御願ひ申上げます次第でございます。……　一月二十六日

○

八代市　有田京

我心慰めかねつ更料やうば捨山に照る月を見て

—新古今集—

編集後記

寒中ながら梅花は芳香を放つて居ります。やがて春光が地をうるほすことでありませう。

本年の重大事は、憲法問題、軍備問題、日ソ交渉問題であるときます。その外に南極探険隊のこと等が耳目をひいて居ります。

依然として日本丸は難航を続けて居りますが、暴風の世にも春は近づいて、鶯の声が庭先の枝に聞えます。この春、いよ〳〵念仏裡の御活動を念じ上げます。

○

福島先生から、かねての御宿願でありました『近角常觀先生の御一生を追憶して』との御原稿を頂き、謹んで記載させて頂きました。今回は先生の御誕生から、御入信までの記録を頂きました。すべて信仰の世界では、聖人の御自督がそのままに私の上に濺がれる大悲とひびいて参ります如く、近角先生の御体験を、同時に私共への大きな光明とさせて頂きませう。

福島先生は、東京都調布市仙川町七九四番地に居られます。

▽仏教生活の告白、は自在丸先生から突然頂き、感激申して居ります。近く出版されます本の一部のお原稿と承りました。但し二回に分けて記載させて頂きますが、よく御精読下さつて、直接先生に御たずね下さいますやう願ひます。先生の御葉書に『何分私の信心は多少人様のと毛色が変つてゐますので、その辺の事が読者の同行さんに見て頂ければ望外の仕合せでございます云々』と申して居られます。

先生は、戸畑市、九工大官舎、に住まれ近角常音先生の奥様の御令弟であられます。

○

▽「応称無量寿仏」は観経の至極の思召しをこの一語に感佩し、いずれの行も及び難き身に『ただ念仏して』の大悲を濺ぎ玉ふ法恩を謝しまつるよすがといたしました、御判読願ひます。

御案内

▼毎月、第一、二、三日曜、午后一時半、日曜講話。南区上町、一道会館。市電、新郊通一丁目下軍、東二丁。

▽毎月十三日、午前午后、熱田区幡野町願入寺。市電、八熊通下車。

▽毎月廿四日、午前午后、昭和区小楼町教西寺。市電御器所通下車。

▽毎月第四日曜、午前十時より岡崎市東別院同明会館、日曜講話。歎異抄讃仰。

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第八巻第一号　昭和三十一年二月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可